

1998 年の本。

真宗の高僧で東洋大学学長を務めた高鳴米峰という人が、次のような言葉を残している。「人間は、いかなる場合でも、モウ（ダメだ）と考えてはならない。どんな時でもマダ、マダ、負けてもマダ、マダ、成功してもマダ、マダ、失敗してもマダ、マダ。これならどんな運命の神様も根負けしてしまう」（『新・三六五日の実業訓』実業之日本社編）。

あせる事態に直面したら「まだ、まだ」と唱えてみよう。あせる気持ちがきつと和らぐはずである。

じつは、たいして努力などしていないのだが、時間がたっているので努力したように見せかけることは可能である。努力を認めろという人のなかには、しばしばこの手の人がいるものだ。

だから私は「結果のともなわない努力は認めない」とはっきりいうことにしている。たとえば、どんなに時間をかけて原稿を書いても、読者にとって面白くないものは面白くない。どれだけ時間をかけたかを嘉したって、何のいいわけにもならないのだ。

人はとかく「いい加減」を嫌う。「適当にやった」というと不信感を持つ。だが「いい加減」とは「よい加減」であり「適当」は文字通り「当を得ている」という意味でもある。

南の島でグータラしている現地の住民に、文明国からやってきた白人がこう忠告した。「そうやって毎日ゴロゴロしていると、いつまでたってもいい生活はできないぞ。少しは働いたらどうだ」

「すると何かね。あんたらが始終忙しそうにしているのは、いい生活とやらを手に入れるたりなのかね」

「当たり前じゃないか」

「じゃあ聞くが、いい生活とはどういう生活なんだ」

「毎日、ゆっくり楽ができて、欲しいものはいつでも手に入るような生活だ」

「何だ、そんな生活ならわしらがいまやってることじゃないか」

われわれがあくせく働くのは楽をしたいからである。それも「先憂後楽」で、楽しみはあとにとっておくという考え方をする人が多い。

やみくもに働いたその成果を人に横取りされて、わずかな対価で満足しなければならないような働き方をしてはいけない。労働搾取の時代は、社会全体がそういうしくみになっていたから個人ではどうしようもなかったが、いまの時代に自分が費やした時間に見あう成果を得られないとしたら、それは自分の責任である。

また、まったく逆のタイプもいる。某大手新聞社の重役だが、その男は働かないことで有名だった。私と会っても仕事の話などめったにしない。だいたいゴルフの話か、どこの何がうまいとか食べものの話をしている。アメリカ、韓国の特派員時代もろくに記事を書かなかったそうだが、それでいて出世コースを歩んで、とうとう重役にまでなった。

その秘訣は何か。一つは情報収集力と分析力。これは超一流だ。部下に指示してやらせるのもじつにうまい。そして、もっとも重要なのは、それを自分の手柄にしなかったことだ。だから彼の下にくると、みんな急にイキイキと働きだし実力もつく。彼は自分の手柄にはしませんが、その部署の実績があがれば結局は彼が評価されることになる。その連続で出世したのだ。

もう一つすごいのは、**独特の一流人脈を持っていること**。これが情報収集力に威力を発揮するのだが、その人脈はどうやらゴルフと食べもので培ったらしい。つまり彼は、仕事は部下にまかせて、自分は好きなゴルフと食い道楽に明け暮れていた。人はきっと仕事のための高等戦略と思うだろうがそうではない。

根っからのグルメで、ゴルフ大好き、ブラブラ大好き人間なのだ。その時間をひねり出すために、**積極的に仕事を人にまかせた**。そして自分は**ゴルフ三昧、贅沢三昧**でいたら自然に超一流人脈ができてしまったのだ。何とも羨ましい優雅な生き方をする男ではないか。

私たちが欲しいと思っている時間は、遊びや趣味に費やす「**自分の時間**」である。ふだんは仕事が忙しくてそのための時間がとれないので、多くの人たちは休みの日を利用する。そこで、土日になると同じ考えの人が集まってきて、どこもかしこも満員という事態になる。

「人生の最高の幸せは、自分の目標を持ち、その目標に進んでいることだ」

仕事は人並みにできるが、その方面で自己を向上させようという気持ちはまるで希薄だ。その男の口ぐせは「何もそんなアクセク働かなくてもいいじゃないか。人とのつきあいのほうが大切だ」なのである。

人とのつきあいが大切だという意味では、この男の意見にも一理ある。だが、私にはこの男の大きな弱点が一つ見える。それは、**自分自身で計画して実行していく力がないこと**である。その自分の弱点から逃げようとしてつきあいをよくしているのではないかとしか思えないのだ。

つきあいとは、他人のおぜん立てに乗ることである。はっきりいって、体さえ持っていけばそれで用が足りる。自分の頭を使うことはほとんどなく、いつも他人によって敷かれたレールの上を走るだけだ。そのような人生を私は好まない。

老後というのは、ひと言でいえば、グータラが公認される世代なのである。何もしなくてよい、どこへ行かなくてもよい、会いたくない人間には会わなくてかまわない。義務から解放された**自由な時間をたっぷ持てるのが、老後ならではの特権**である。

ならばその自由さ、解放感をじっくりと味わいながら、のんびりゆっくり、スケジュールなどにとらわれずに暮らすほうがよいではないか。現役のときは、必死にならないと人に後れをとるので、何かにせき立てられるように生きてきたはずだ。それと同じことをくり返す必要はないのではないだろうか。